

運営委員会報告

新しい事務局のもとでの第一回運営委員会が、一九八一年十一月

十四日、神田駿河台の中央大学会館で開かれた。議題は、

一、村研三〇周年大会実行委員会の組織化について

二、三〇周年大会および記念事業について

一、その他

大会実行委員会については、従来の宿題委員の任務をも兼ねるものとの了解のもとに、各地区運営委員に選出を任せることとなつた。

ただ人数の割振りを決め、関東地区は従来の準備委員（四名）に一
人二名加え、関西地区四名、東北地区三名、北海道・西部地区各2
名とし、実行委員会はそれに事務局と大会開催校（地）が加わって
組織されることとなつた。

三〇周年記念大会の持ち方および記念事業については、本大会開
催中、大会参加者にくばられたアンケート（「来年度の共通課題に
関してのご意見」・「三〇周年記念事業に関するご意見」）結果
(別項参照)が参考資料として討議された。共通課題に関しては、
「村落研究の戦前・戦後」に賛成する意見が多くみられているが、
運営委員会席上、僅か二日の大会でそれが可能かといった懸念が表

明され、さらにもう少し枠をゆるめ、取り組み易い題目にしてはどうかという意見もあって、アンケートに示されている一案「村落の変貌と村落社会研究－村落社会研究三十年の歩みをふまえて－」に賛成という意見が多数であった。共通課題に関連して、三十周年大会にも従来と同じように自由報告の枠を設けるべきか否かについて種々意見がだされ、この点についてはなお慎重に全運営委員にはがきで意見を求めることとなった（結果別項参照）。

三十周年大会および記念事業については、今後、実行委員会において具体化されていくことになるが、運営委員会当日、東北の細谷委員から、前もって打合せがおこなわれた開催地仙台における各委員の意向が紹介された。即ち、大会を二日とするか三日とするかは最初の日の記念行事の組み方如何にかかるが、大規模な記念公開講演会の実施には無理がある、小じんまりとした草創期のことを話合う内輪の懇談会的なものにしてはどうかといった意見がだされていること、通常の大会としては二日、日程は日本社会学会との関係を考えあわせて一〇月十七日（日）・十八日（月）という案が考えられ、場所は仙台市近郊にある茂庭荘を予定している、というものであった。

三十周年記念大会にあわせて、研究成果の特別号を刊行する企画は既に準備委員会の段階でも検討されてきた件であるが、これから編輯、執筆依頼で間に合わせることは実質的に不可能であり、財政的にも無理があり、記念大会の研究発表を充実したものにして年報の特輯として組込んでいくことでのいいのではないか、今後、開催

が予定される回顧座談会的な試みはなるべく『研究通信』を特輯的に増頁して紹介していくことにしてはどうか、等々。此等すべて今後の実行委員会でさらに詰められていくことになる。

その他の議題として、復刻版の印税や村落社会研究公双書の積立金について、何等か三十周年記念事業に寄与しうるような用途を考えたらいとの提案も出された。なお、中央大学が事務局を担当するに当って、そのメンバーとして文学部社会学の大学院生櫻村悦子・三本松政之両君の紹介があった。